

The Political Economy of Hunting and Sharing Marine Mammals in a Canadian Inuit Society : A Case Study from Akulivik, PQ.

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2015-10-26
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 岸上, 伸啓
	メールアドレス:
URL	所属:
	http://hdl.handle.net/10502/5793

日本人による北アメリカ先住民研究の 動向について：1990年代以降を中心に *

岸 上 伸 啓

(1) はじめに

北アメリカ地域を研究対象とする日本人の人類学者の数は、ほかの地域と比較すると少ない。また、研究テーマや地域に偏りがみられることが指摘されてきた（青柳・綾部 1986:295）。その一方で、日本人の人類学者による北アメリカ研究は徐々にではあるが増加してきた（青柳 1996; 岡田 1996）。とくに北アメリカ研究では、アメリカ合衆国のアラスカ地域やカナダの先住民研究が数多く行われてきた。私は、この流れは、文部科学省による科学研究費補助金による複数の調査の実施、国立民族学博物館や北海道立北方民族博物館の設立とその後の活動と深く関わっていると考えている。

すでに1980年代までの北アメリカ研究については、レビュー論文(Gamo 1980a; 青柳 1996; 岡田1996)が存在するため、本稿では、北アメリカ先住民についての1990年代以降の日本人による代表的な北アメリカ先住民研究を中心にレビューし、動向を把握するとともに、今後の研究課題を指摘したい。本稿では、(a)アラスカ地域、(b)カナダ極北地域、(c)カナダ亜極北地域および北西海岸地域、(d)カナダ南部およびアメリカ本土地域という4つの地域に分け、日本におけるアメリカ合衆国やカナダの先住民研究の展開を紹介したい¹。

(2) アラスカ地域

1960年に明治大学アラスカ調査団によってアラスカ地域に関する現地調査が行われた。この調査団の民族学班には岡正雄と祖父江孝男が、考古学班には岡田宏明が参加した。岡正雄ら民族学班はアラスカ内陸部のアナクトヴク・パス(Anaktuvuk Pass)およびアラスカ北西沿岸部のポイント・バロー(Point Barrow)とポイント・ホープ(Point Hope)において調査を実施した。岡田宏明ら考古学班は、ウイスコンシン大学のC・チャード(Chard)博士らとともにアラスカ半島のポート・モラー(Port Mollar)のホット・スプリング遺跡(Hot Spring Site)で発掘調査を行った（渡辺、岡、

杉原 1961; 祖父江 1972)。

1962年と1967年の第2次および第3次民族学調査ではポイント・バローの代わりにネルソン島(Nelson Island)がこれまでの2つの村とともに調査された。第2次調査隊には岡正雄、蒲生正男、岡田宏明が、第3次調査隊には蒲生正男、岡田宏明、宮岡伯人が参加した。宮岡伯人は中部アラスカ・ユピックの言語調査を1967年より開始した。

その後、岡田宏明、岡田淳子、小谷凱宣らが1972年、1974年、1977年にポート・モラーを発掘した。彼らはさらに1974年および1977年にネルソン島において考古学的な踏査を実施した。これらの民族学および言語学、考古学調査は、日本におけるアラスカの人類学的研究の本格的な開始を告げるものであった。彼らの調査の内容に関しては、蒲生(Gamo 1980a)と岡田(1996)によって紹介されているので、ここでは割愛する。

それまでのアラスカ調査の成果の一部は、1978年に国立民族学博物館において開催された国際シンポジウム「アラスカ先住民の文化史」(Culture History of the Alaska Natives)として公開された(Kotani and Workman 1980)。蒲生(Gamo 1980 b)は、このシンポジウムにおいて、アナクトヴク・パスとポイント・ホープ、ネルソン島の3村におけるエスキモーの社会構造を比較検討し、その特徴を抽出しようと試みた。

蒲生正男が逝去した1981年以降の日本人によるアラスカ研究は、おもに岡田宏明、岡田淳子、小谷凱宣による考古学調査および宮岡伯人や大島稔による言語調査が中心となり、一時的に民族学的研究が停滞することになった²。

宮岡の調査プロジェクトは、1990年代には環北太平洋の言語の比較研究へと発展していった。彼は日本の北海道からサハリン、カムチャツカ半島、チュコトカ半島をへてアラスカに至り、さらに米国オレゴン州沿岸へといたる北太平洋沿岸地域に分布する先住民言語の比較研究プロジェクトを実施した(宮岡1992; 宮岡編1992)。また宮岡自身はアラスカ・ユピックの言語や文化について精力的に出版してきた(Miyaoka 1994; 1996; 2000)。

益子(1977)は1970年代半ばよりアラスカ南西部に住むトリンギットの研究を開始した。彼はポトラッチを、死と再生をめぐる神話を手がかりに吟味し、ポトラッチとは「第2の葬儀」であるという結論に達した。さらに、火の中に食物や毛布を投げ入れる慣行は、トリンギットの論理に従えば、富の破壊ではなく、死者に対する贈り物であったことを指摘した。益子(1992; 1993)はトリンギットのポトラッチの意味やサケの神話の分析も行った。

多くの北アメリカ先住民のコミュニティは、失業やアルコール問題など社会経済問題を抱えている場合が多いが、宣教師ダンカンによって作り出されたアラスカ南西部のメトラカタラ・コミュニティでは比較的安定した発展を遂げ、今日に至っている。岡田淳子らは、コミュニティ開発の成功した事例として、このダンカン型社会の歴史的展開を解明しようとしてきた(岡田 2000)。岡田淳子は、1998年4月から2000

年3月まで科研プロジェクト「北西海岸インディアンの開発人類学的研究」を組織し、アラスカ州南部にあるチムシアン¹の村メトラカトラ(Metlakatla)で調査を実施した。岡田淳子(2000a,b)は、メトラカトラの形成と発展を歴史的に跡付けた。岡田宏明(2000)はメトラカトラ住民の生業戦略に関する研究を、益子待也(2000)はアラスカに移住したチムシアンの伝統の創造について研究をした。齊藤玲子(2000)は、メトラカトラにおける観光と芸能・工芸活動に関する調査を実施した。岡庭(松林)義行は、宣教師ウィリアム・ダンカンや教会が、チムシアンのカナダからアラスカへの移住やメトラカトラ・コミュニティの形成において果たした役割を検討している。さらにダンカンが理想社会を実現するためのモデルである「ダンカン・ソサイエティ・モデル」(Duncan Society Model)を検討している(松林 1998a; Matsubayashi 1998b; 岡庭 2000; 2004a)。

これらの研究はおもに複数の研究者から構成される団体調査によって実施されてきたが、1990年代には井上敏昭のように単独でアラスカ内陸部のグイッチンの村で調査を行う研究者がでてきた。井上は、グイッチン社会におけるポトラッチ儀礼やビーズワーク、狩猟の実践や地元で捕獲される野生動植物の食物を分かち合う実践が、アイデンティティ構築と深く関わっている点を記述、解明している(井上 1996; 1999; 2003; Inoue 2001)。また、グイッチンによる石油開発反対運動についての分析を行っている(Inoue 2004)。井上が調査地とするアラスカ内陸部では、人類学者が政治的な理由から調査を実施することが難しく1970年代以降体系的な民族誌的調査が実施されていないため、彼の研究は現代のアラスカ先住民社会の人類学的理解に大きく貢献すると思われる。

(2) カナダ極北地域における先住民調査

1972年に本多勝一によってすぐれた民族誌である『カナダ・エスキモー』が出版されたが、カナダ極北地域の先住民研究は、1980年以降に活発になってきたといっていよい。1970年代の半ばにトロント大学のアーヴィング博士のもとに留学していたスチュアート・ヘンリは、1978年より早稲田大学文学部の1年生ゼミでイヌイットについて講義を開始するとともに、早稲田大学の田村すず子が主催する北方言語・文化研究会の1部会として極北研究会を毎週水曜日に開催していた。

1980年代前半から後半にかけてスチュアートは科研調査プロジェクトを組織し、北ケベック・イヌイットの団体であるアヴァタック文化研究所と協力しながら、ケベック州とラブラドルとの境界にあるハドソン海峡に面したヌネンガック遺跡やウンガヴァ湾西岸において考古学的な調査を実施した³。この調査には、山浦清、天野哲也、臼杵勲男、手塚薫、花海義人、亀田直美らが参加した。また、考古学隊とは直接関係しなかったが、アヴァタック文化研究所の協力を得て、1984年より岸上伸啓はハドソン湾に面するアクリヴィク村において社会人類学的な調査を開始した。

スチュアートは1990年に中部極北地域のペリー・ベイ地域において考古学および民族考古学的な調査(最初の調査は1975年)を再開した。当初は、考古学的な調査が中心であったが、1990年代半ば以降は民族学的な調査を行うようになった。ペリー・ベイ調査には山浦清、岸上伸啓、手塚薫、熊崎保、亀田直美、大村敬一らが参加した。その後、この科研によるペリー・ベイ調査はスチュアートと大村を中心に実施されてきた。

北ケベック地域の研究成果としては、手塚薫による民族考古学的な研究と岸上による社会人類学的な研究がある。手塚はヌネンガック遺跡に残った動物遺存体や住居址の調査を行い、大型の住居址と毛皮交易の進展との間に相関関係がみられることを指摘した(手塚 1999)。さらに、毛皮のみならず、アザラシの肉など狩猟・漁労活動でえられた資源もヨーロッパ人漁民や毛皮交易者を相手とする交易の対象となっていた可能性を指摘し、イヌイット社会の変化に関しては外部との接触という要因が重要であることを示した(手塚 2002)。

岸上はアクリヴィク村を中心にヌナヴィク地域のイヌイットの社会構造や社会変化を研究してきた(岸上 1990b; 1998)。とくに名前や命名のイヌイット社会における文化的な重要性を指摘し、変化する中でイヌイットがいかに社会関係を再生産してきたかを解明した(岸上 1990a; 1997; 1999c)。また、岸上は先住民諸権益請求処理後にヌナヴィク・イヌイットが導入した、生業活動を促進させるためのハンター・サポート・プログラムの諸影響を調査し、食物分配の活性化やイヌイット意識やコミュニティ意識の高揚に貢献していることを指摘した(岸上 1996b; 1998; Kishigami 2000)。さらに、岸上はヌナヴィク・イヌイットが実践している食物分配の調査や他社会の事例研究を通して、イヌイットの食物分配には、移譲、交換、再分配のタイプがあり、現在のイヌイットの食物分配の大半は移譲であると主張した(岸上 2003b; 2004c)。このほかに岸上はヌナヴィクの事例をもとに、なぜイヌイットがキリスト教を受け入れたのかという問題やカナダ・イヌイット社会におけるエスニック・アイデンティティとしてのエスニシティの歴史的変化を跡付ける研究を行った(岸上 1992; 1994b)。

ペリー・ベイ調査は1990年から本格化し、民族考古学的研究、文化・社会人類学的研究、言語学的研究においていくつかの成果をあげてきた。スチュアートは最近まで使用されていたキャンプ地や狩猟場に村の古老を同行し、そこでインタビューを行うという新しい形の民族考古学的調査を実施した。そして同氏は、現在は使用されていない石塚群がカリブー猟にどのように利用されていたか、さらにかつての住居址がどのように利用されていたかを解明した(スチュアート 1990a; スチュアート・手塚・熊崎 1994)。

スチュアートや岸上、大村はペリー・ベイ村およびその周辺において文化・社会人類学的研究を実施した。スチュアートは、海と陸の対立など世界観や食物分配、女性の役割について研究をした(スチュアート 1990b; 1991)。スチュアートのネットワーク・

イヌイット研究への貢献は、やな漁労や春のカリブー猟に関して記述的な記録を残したこと（スチュアート 1992a, b; 1993）、さらには現代のイヌイット社会における生業活動の意義を検討したことである。スチュアートは定住後、機械化されたイヌイットの狩猟・漁労活動が経済的に重要であるよりも、国家や世界システムの中でアイデンティティの維持など文化的なサバイバルと深く関わっていることを指摘した（スチュアート 1995; 1996）。また、イヌイット社会における子供の性別認識と儀礼的な性変換の風習であるキピユイチョックについて報告している（Stewart 2002）。後で述べるように1990年代後半から、スチュアートの研究は先住民と国家との関係へと重点がシフトしていった。

岸上はペリー・ベイ調査隊の一員としてペリー・ベイ村の社会構造の記述や社会変化、食物分配の研究を担当した。同氏はペリー・ベイ村の全世帯を訪ね、世帯表と村全体の親族図を作成し、村自体が10の拡大家族から構成されていること、村の世帯の約90%が核家族であることを示した。さらに狩猟・漁労活動、食物分配、村内政治の領域において拡大家族関係が重要な社会単位であることを例証した（岸上 1991; 岸上・スチュアート 1994）。また、ネツリク・イヌイットの食物分配は特定のパートナー間のアザラシ肉の分配（交換）と考えられてきたが、現在のネツリク・イヌイット社会では拡大家族内での食物の分配が中心であることを例証した（Kishigami 1995）。岸上はペリー・ベイ村のイヌイット社会の事例を用いて、先住民社会に関する変容仮説と再生産仮説を検証し、一見大きな変化を蒙っているようにみえるイヌイット社会は、社会関係に着目した場合、再生産的な変化をしていることを示した（岸上 1996a）。このほかに岸上はペリー・ベイ村において小中学校教育について地元の学校で参与観察を行い、文化や言語の伝承や現代社会への適応において学校教育が重要であることを指摘した（岸上 1994a）。

大村は、言語や認識、アートをキー・ワードとしてペリー・ベイ村において調査を実施してきた。言語調査では、ペリー・ベイ方言の基本語彙の収集・記述を行うとともに、双数の消滅傾向を取り扱った言語変化の研究（大村 1994）を行った。同氏はさらに、イヌイットの色彩認識や環境認識、身体認識、方位認識の研究を行った。大村はペリー・ベイ村のイヌイットの色彩認識の調査を通して色彩はイヌイットが自然環境の詳細を読み取るときの鍵になっていることを指摘し、生業活動に不可欠な民族知識になっていることを指摘した（大村 1996; 1999a）。さらに、身体観と世界観との関係（大村1997）、資源観や大地（環境）観（大村 1999b）、ナビゲーション（大村 2001a）、伝統的な生態学的知識（大村2002）などのテーマについて研究した。これらの研究は、イヌイットの伝統的な生態学的な知識の生成や構造の解明に関する探究であった。大村は、イヌイットの伝統的な生態学的な知識といわゆる科学的な生態学的知識との違いを、セルトーの戦術と戦略の概念を援用して特長づけた。そしてイヌイットの戦術的な知の枠組みは、「環境」を対象化し、その対象化した「環境」を操作し、

管理する近代の戦略的な知の枠組みとは対極にあることを指摘した。

大村は滑石彫刻のような現在のアート制作の状況を調査し、現代の生活を支える現金収入のひとつであるとともに、イヌイットのエスニック・アイデンティティを象徴的に表明する手段となっていることを指摘した。そして滑石彫刻の制作活動は、近代化とイヌイットの文化との間をとりもつ蝶番として機能していると結論づけている(大村 1996)。また、イヌイットの滑石彫刻の特徴や歴史を調査し、イヌイットと彼らを取り込む主流社会との間の複雑な相互作用の中で生成され、両者の間の対話であり、かつナショナル・イメージやイヌイット・イメージが生成される実験の場となっていることを指摘している(大村 2001b)。

ペリー・ベイ調査プロジェクトは、さらにイヌイットのエスニック・アイデンティティや自己イメージの研究をも生み出した。スチュアートはメディアの中に出てくるイヌイットのイメージを検討し、カナダの国内政治におけるイメージの重要性を検討した。そして同氏は、イヌイットの狩猟活動が、1970年代の政府やメディアによるエスキモーからイヌイットへという民族名称変更においてイヌイットのイメージや民族識別の手段としていかに利用されたかを論じた(スチュアート 1998; Stewart 2002)。大村はイヌイットの日々の生活の中で構築されている自己イメージを検討し、イヌイットはそれを操作、利用しながら肯定的なエスニック・アイデンティティを作り出していることを指摘した(大村 1998; Omura 2002)。現在、大村はペリー・ベイ地域の地名やナビゲーションの研究を継続しており、今後の展開が期待される。

2002年よりスチュアートは「カナダにおける先住民のメディアの活用とその社会・文化的影響」の科研プロジェクトを開始した。岸上は、ヌナヴィク地域のイヌイットの村を事例としてイヌイットがラジオ、テレビ、電話、文字媒体、インターネット、ビデオ、GPS、無線機をどのように利用しているかを素描した。同氏はイヌイット社会におけるFMラジオと電話の情報伝達における重要性や電話が社会関係や相互扶助関係の維持において重要な役割を果たしている点を指摘した(岸上 2004a)。

1998年から岸上は国立民族学博物館の先端民族学研究プロジェクトとして「先住民による海洋資源の利用と管理」の研究を開始した。2003年から同プロジェクトは第2段階へとはいり、「先住民による海洋資源の流通と管理」の研究が開始された。これらのプロジェクトは、民博の共同研究会と科学研究費補助金による海外調査とを組み合わせたものであったが、その中で、カナダの極北地域やアラスカにおける海洋資源問題が取り扱われた。岩崎(2003)はカナダ西部極北地域のシロイルカ資源の管理について、大村(2003)はカナダのヌナヴト準州の野生生物資源の管理について、岸上(2001b; 2002e; 2003a)はカナダのケベック州極北地域ヌナヴィクにおけるシロイルカ資源の管理について研究をした。また、井上(2003)はアラスカ内陸部におけるグイッチンによるサケ資源の利用と管理について研究した。これらの研究から先住民社会において資源管理を成功させるためには、先住民の自発的な参加や彼らの民俗知識を管理に

活用することが鍵となることが判明した。岸上（2002c）はこのプロジェクトの1部としてカナダ極北地域における環境汚染問題とイヌイットの対応に関する研究を実施し、問題解決において主流社会と先住民社会との仲介者としての人類学者の重要性を指摘した。

（3）カナダ亜極北地域および北西海岸地域における先住民調査

1960年代から1990年にかけて、原（須江）、煎本、新保らによってカナダの亜極北地域の先住民社会の研究が行われた。

原は、北西準州のヘアー・インディアン¹の民族誌的な研究を行った。1960年当時、ヘアー・インディアン²の社会や文化についてはほとんど知られていなかった。原の研究はこの民族に関する最初の体系的な民族誌であった（原 1979; 1989; Hara 1980）。煎本は、1975年から1976年にかけてサスカチュワン州北部に住むチベワイヤンの集団構造、生業の生態、活動システムについて生態人類学的な調査を実施した（Irimoto 1981）。原や煎本の調査地は、調査が政治的にも環境的にもきわめて困難な地域であった。原の研究同様、煎本の研究は、日本人による数少ない北アメリカ先住民研究に対するオリジナルな貢献のひとつである。

カナダのウオータルー大学を拠点として活躍した新保満は、北西準州のデネー・インディアン³について1988年から1990年にかけて統計学者のC・A・ストラザース（Struthers）とともに先住民社会の変化に関する調査を、学校教育に焦点をあわせて実施した（新保1993; 1995; 1999）。このなかで新保らは若いデネーは学校教育を受けて賃金労働に従事することを志向している一方、年長のデネーは伝統的な生活様式の維持を志向しており、世代間にジレンマがあることを指摘している（新保・ストラザース 1999）。また、学校教育を受けた結果、デネーが南の都市へ移住する条件が整い、将来、移動する可能性があることが指摘した（新保 1999）。

大曲佳世はカナダのオンタリオ州北部のジェームズ湾沿岸に住むオマシュケゴークリー（Omushkegowuk Cree）が住むムースファクトリー（Moose Factory）とピワナク（Peawanuck）において現地調査を1990年代の前半に実施し、女性の民俗知識やブッシュ・スキルとそれらの継承について研究をした。現在のクリー社会は、賃金労働、生業活動、政府支出金からなる混交経済を基盤としている。彼女は、教育環境の変化、ブッシュで過ごす時間の減少、価値観の変化などのためにブッシュ・スキルをブッシュで見て、体験して習うことができなくなりつつあるという継承の問題を取り扱っている（Ohomagari 1996; Ohmagari and Berkes 1997）。クリーの女性が、独自の文化やアイデンティティを保持しつつ、この混交経済の中で成功するためには、クリー文化とヨーロッパ系カナダ文化の両方の知識と技能を身につけた二文化的な人間でなくてはならない。このタイプの経済開発を促進させるためにはヨーロッパ系カナダ文化を志向している若い女性が伝統経済に必要な知識や技能を習得する必要性を彼女は主

張している(Ohmagari 1995a)。また、持続可能な生活を維持するための適応戦略としてブッシュ・フードや技能が必要であり、その継承の問題点を論じている(Ohmagari 1995b)。ブッシュ・フードやブッシュでの活動、野生生物資源の利用が、アイデンティティ形成や社会の福祉に重要であることが指摘されている(大曲 1998; Ohmagari 2004)。

北アメリカのアラスカ南西部からオレゴン州にかけての海岸地域に住む先住民は、北西海岸先住民と総称されてきた。大貫(1977)はトーテム・ポールの機能についてを社会的かつ歴史的な視点から研究した。

渥美一弥(1996)は、バンクーバー島の南部に住むサーニッチ(Saanich)が主観的に捉えている伝統に焦点をあて、彼らの伝統とヨーロッパ系カナダ人が彼らに抱いているイメージとの関係を検討している。その上で、1980年代以降に復興しつつある神話、地名、個人名の今日的な意味について考察をくわえている。渥美は、サーニッチの主観的な伝統文化とはカナダ主流社会との政治的な相互交渉の中で作りだされた過去にあったと想像される「伝統」とあらたに創造されてきた「伝統」からなることを指摘した。その伝統の復興は、サーニッチの真正な先住民としての存在をカナダ主流社会に明示するためのものであった一方、それはカナダ主流社会からの集団としての認知、名づけであったと主張している。

岩崎まさみ(1999; 2002)は、北アメリカの北西海岸バンクーバー島に住むクワクワカワクのサケ資源の伝統的な管理とカナダ政府による資源管理について研究した。クワクワカワクは時期を変えて川を遡上する数種類のサケを適度に漁獲しながら利用してきたが、現在のカナダ政府が認可しているサケの商業漁業は海上でのサケの種類を考慮しない一括捕獲であり、資源量の管理ができていないことを指摘した。また、木材の搬出による産卵場所のかく乱も大きな問題であった。岩崎は、現在のサケ資源の減少の遠因は、カナダ政府によるサケ資源管理の失敗やブリティッシュ・コロンビア州の林業振興政策にあることを指摘した。

立川陽仁は、1990年代末から2000年代にかけてカナダのブリティッシュ・コロンビア州バンクーバー島の町キャンベル・リバーでクワクワカワクの商業漁業や漁民に関する調査を実施した。彼は、クワクワカワクは「サケの民」であるとする言説と彼らの現実の日常生活との間に大きなギャップがあることを指摘し、その意味をカナダの先住民政治の脈絡の中で解明しようと試みている(立川 2004b)。立川(1999a)は、ポトラッチの研究史をまとめ、ネイティヴ・アンソロポロジストや人類学者による対話を通した多声的な研究の必要性を指摘している。また、立川(1999b)は、カナダ植民地統治期におけるクワクワカワクの貴族層の衰退について研究をしている。彼はポトラッチにおけるヨーロッパ製品の利用や天然痘などの外来の伝染病の流行が、クワクワカワクの世界観や貴族層のランクの衰退にどのような影響を及ぼしたのか、さらにはポトラッチがどのように変容したのかを解明した。そして貴族層の衰退は、政治・

経済的な要因のみならず、世界観の変容という宗教・象徴的な要因によっても引き起こされたことを指摘した。さらに、立川はポトラッチについて、人類学者はその意味を強調するのに対し、現在の先住民は型を重視するという、ポトラッチを内と外の視点から検討している（立川 2004a）。このほかに、1850年ころから1920年ころまでの北西海岸先住民の漁労活動を再構成したうえで、当時のサケ漁業や缶詰業の展開にもかかわらず、漁労活動が存続していた点を指摘した論文（立川2002a）や商業漁業を介しての先住民の企業家の出現や彼らの活動や戦略を取り扱った論文（立川 2002b）、先住民商業漁民の資源管理に対する認識や政府への対応に関する論文（立川 2003）がある。彼の研究は北西海岸先住民の現状を取り扱った数少ない研究であり、今後の展開が期待される。

岡庭(2004b)はクワキウトルの冬の儀礼であるツェカ儀礼をシェクナー(Schechner 1973; 1988; 1993)のパフォーマンス理論の視点から研究した。儀礼は世界観として研究されるだけでなく、パフォーマンスとしても研究することができる。パフォーマンスをする人(performer)は、観衆(audience)を巻き込むことが重要である。このためには、技能(skill)、世界観(cosmology)、演出(promotion)の3つのフェーズが有機的に機能することが必要であることが指摘されている。

カナダの亜極北地域の毛皮交易については、ハドソン湾会社の交易所の日記を利用し、1830年代のチペワイヤンとヨーロッパ人との関係を描いた、阿部(1999)によるエスノヒストリー研究が存在する。また、煎本(1994)は、毛皮交易と先住民の家族狩猟テリトリー(hunting family territory)の出現との関係についてあらたな見解を提起している。彼は、このシステムが毛皮交易に参加したチペワイヤンの間には出現しなかったことに着目し、モンタニエやキャリーの地域と比較し、このシステムの成立には大型狩猟獣の減少に代表される生態環境の変化（生活基盤であるサケやカリブーが減少し、ビーバーのワナ猟に依存せざるをえなくなったこと）とビーバーの生息密度（ビーバーの生息密度が高い地域であること）という2つの要因が重要であることを指摘している（煎本 1994:10-11）。カナダにおける毛皮交易の展開についての俯瞰的な歴史研究が木村(2002; 2004)によって出版されている。

（４）カナダ南部およびアメリカ合衆国本土における先住民調査

1990年代にはいり青柳清孝(1993; 1994)は、多文化主義の脈絡の中でアメリカ先住民(Native American)と学校教育を考察したのち、先住民の部族経済、リーダーシップ、教育の3分野における過去30年の研究動向に関する調査を行った。その後、彼の研究関心はアメリカの都市先住民の生活や学校教育の問題へと移行した。彼は1995年から1997年まで、国立民族学博物館の松山利夫とともに共同研究会「都市における先住民社会の研究」を実施した。また、松山利夫を代表者とする文部科学省科学研究費国際学術研究「現代の諸都市における先住民社会の文化人類学的研究」によって1996

年および1997年にシカゴやアルバカーキーにおいて調査を実施した。シカゴに転住した先住民の個人史を調査し、都市生活の適応の上で2種類の移住者、すなわち自ら自発的にシカゴに移住した者と米国政府の転住政策による移住者の違いに関して考察を行った(青柳 1998a)。さらに、シカゴにある先住民援助組織であるアメリカ・インディアン・センター(American Indian Center, Inc)やセント・オーガスティン・センター(St. Augustine's Center for American Indian, Inc)の歴史や機能を研究した(青柳 1998a; 1999)。

青柳は、人種統合を目的としたシカゴのマグネット・スクールの研究(青柳 1998b)やアーバカーキーとシカゴを事例として都市インディアンの学校教育の実態に関する調査を実施し、都市におけるインディアン教育を向上させるためには、多文化教育の充実、特別学級の増設拡大、特別なインディアンのための学校の創出が必要であると主張している(青柳 2001)。このほか青柳は、インディアン保留地におけるカジノと経済開発の問題(青柳 2000)やアメリカの自然史博物館においてアメリカ・インディアンがどのように展示されているかに関する研究(青柳 2002)を行っている。

松山の都市研究プロジェクトには、スチュアート ヘンリ、和智綏子、岸上伸啓ら北アメリカ研究者が参加していた。スチュアート(1999)は、アメリカとカナダの先住民政策を比較し、前者は都市への移住積極策をとり、後者はそのような政策をとらなかったが、両国とも先住民は都市へ移住したという事実を指摘した。このことは先住民政策以外の要因、例えば経済のグローバル化などを考慮しなければならないことを意味しているといえるだろう。

カリフォルニア州南部のサンディエゴ付近の先住民について研究してきた和智(1994)は、この都市先住民プロジェクトでは、同地域における文化保存とエスニック・アイデンティティの問題を研究した(和智 1999)。岸上は、モンリオール在住のイヌイットの生活状況全般について研究したが、とくにナゼイヌイットが極北地域から都市部へ移動してきたかについて報告している(岸上 1999a; 1999b; 1999d; 1999e; 2002d; 2002f)。イヌイットの移動には、極北のコミュニティーにおける職や住宅の不足や社会問題が人々を押し出す要因として作用している一方、都市では自由や教育、病院、娯楽施設などが人々をひきつける要因として作用している(岸上 1999b)。また、岸上は都市ではイヌイットの間に生活や経済的な格差において多様化が進んでいるが、言語や日常生活においてイヌイット的な実践を伴わないにもかかわらず、イヌイット意識を持っている人々が出現していることを、極北地域のアクリヴィク村の事例と比較し、指摘した。彼は、生活実践にもとづいて形成された文化的なアイデンティティと生活の実践を伴わない政治的なイヌイット意識であるエスニック・アイデンティティを峻別するべきであると提案した(Kishigami 2002d; 2004b)。

谷本和子は、アメリカ・アイダホ州のネズ・パース・インディアン(Nez Perce)社会における文化化(Tanimoto 1994)の研究や家族の研究(1998c)、ティピ(伝統的な円錐

形のテント)の現代的な意味に関する研究(1998a)を行っている。また、アメリカにおけるインディアン政策を跡付けながら、同化のプレッシャーのもとでの汎インディアン意識の出現や特定部族のアイデンティティの現状について論じている(谷本 1998b)。歴史学者の鶴井裕典(2000)は、アメリカにおけるインディアンと白人との関係の歴史的な変化を検証しながら、保留地と都市という2つの空間の両方においてアメリカ・インディアン運動によって形成されてきた汎インディアン的なアイデンティティを吟味している。このほかに、手塚薫(2003)による北アメリカ大平原におけるバイソンの狩猟法、解体・処理法、毛皮交易、そして産業化の中でのバイソンの役割に関する研究が存在する。

また、先住民の現代文学に関するカルチュラル・スタディーズ的な研究が最近行われているのも注目に値する(室 1997; 1999; 2000; 渡辺 1999)。例えば、室(1999)は国民国家の枠を取り外し、北アメリカ先住民の現代文学の特徴や展開を検討し、共通に見られる戦略的本質主義という特徴を指摘するとともに、内容の多様化の傾向を指摘している。

(5) 比較研究やそのほかの先住民研究

ここでは広域研究や国家と先住民との関係に関する研究を紹介する⁴。加藤やスチュアートは、カナダの国家と先住民との関係に関する研究を行っている。政治学者の加藤(1990; 1996)は、国家の法制度の中でのイヌイットの位置づけや、多文化主義と先住民との関係を吟味している。スチュアート(1997; 2003c)は、フランス系が主流社会を形成しているケベック州の中に住むイヌイットを、ランド・クレイムとの関係から研究している。さらに「先住民とはだれか」という問題を追及し、先住民を認知するものしないのもそれぞれの先住民が属する主流社会もしくは国家であることを指摘している(スチュアート 1998b)。

民族音楽学者の谷本は、西はロシアのシベリア西部から東はグリーンランドに分布する先住諸民族の踊りや歌の比較調査を実施した。彼は、イヌイットやユピックの音楽を採録する(谷本・森田 1992)一方、ドラム・ダンスの比較から、マッケンジー川を境にして、その東西でドラムの打ち方が異なり、音楽的な差異があることを指摘している(谷本 1992)。

また、生態人類学者の渡辺仁(1988; 1992; 1993)は、晩年、北太平洋沿岸文化圏という概念を提起し、比較研究を試みた。この文化圏では、定住性や水産物の経済的な重要性が見られる。さらに社会的な階層化の発達など類似要素が見られる。また、鉦や笠、サケ儀礼複合体などの特殊な共通要素が見られる。渡辺は、この文化圏に見られる文化諸要素の類似と差異を、類似した海洋環境への適応進化と文化交流の視点から説明しようとした。彼はこの壮大な比較研究を完成させぬまま、この世をさったために、この研究課題は次世代へと残されたままである。

国立民族学博物館の大塚和義は、交易をキーワードとして北太平洋沿岸地域における先住民社会の交易と経済的な繁栄に関する展示プロジェクト「ラッコとガラス玉」を組織し、実施した。このプロジェクトでは、この地域の先住民がヨーロッパ人や中国人、和人との毛皮交易以前にも活発に交易をし、富を蓄え、文化的な繁栄を享受していた事実を展示によって検証した（大塚 2001; 2003）。このプロジェクトの中で、岸上(2001a; 2002a)はアラスカ地域の先住民交易やカナダ北西海岸からアラスカ地域にかけての先住民交易の実態について歴史的に研究をした。

（6）検討：傾向と課題

6.1 地域の特長

日本における北アメリカ先住民研究はアラスカ地域およびカナダ極北地域、北アメリカ北西海岸地域を中心に展開してきた。その流れの始まりは、1960年代にはじまる岡正雄の流れを汲み、岡田宏明や小谷凱宣らによって受け継がれたアラスカ研究プロジェクト、スチュアート ヘンリによって1980年代に開始されたカナダ極北研究プロジェクト、および宮岡伯人を中心とする環北太平洋言語研究プロジェクトに大別できる。これらの一連の調査プロジェクトは、文部科学省そして後には日本学術振興会の科学研究費補助金によって支援されてきた。最近ではカナダの北西海岸を研究する研究者が現れてきたが、そのほとんどが個人研究によるものであった。また、これまで見てきたようにカナダの亜極北地域やアメリカ合衆国本土の先住民を対象とした人類学的研究の数は少ない。

日本の北アメリカ先住民研究において、国立民族学博物館や北海道立北方民族博物館、北方学会が主催した北方諸民族に関する国際シンポジウムや特別展示が果たした役割も重要であった。国立民族学博物館では、小谷凱宣による1978年開催のアラスカ先住民の文化史に関する文部科学省国際シンポジウム、小山修三らによる1998年開催の第8回国際狩猟採集社会研究会議(CHAGS 8)、秋道智彌による2001年開催の水産資源をめぐる紛争に関する民博国際シンポジウム、大塚和義による2001年開催の北太平洋における先住民交易と工芸に関する文部科学省国際シンポジウム、岸上伸啓による2002年開催の海洋資源の利用と管理に関する文部科学省シンポジウムなどが開催された。これらのシンポジウムでは、日本人の北アメリカ研究者が研究を報告し、その成果は国立民族学博物館の刊行物や一般図書として出版されている(Kotani and Workman 1980; Wenzel, Hovelsrud-Broda and Kishigami 2000; Keen and Yamada 2001; Stewart, Barnard and Omura 2002; 秋道・岸上 2002; 大塚 2003; 岸上 2003; Kishigami and Savelle in press)。

大林太良や岡田宏明が館長を勤めた北海道立北方民族学博物館では、毎年、海洋適応や人と動物の関係、漁労、食と住、狩猟儀礼、定住と移動、精神文化における動物、開発と環境などテーマを決めて北方民族に関する国際シンポジウムを開催してきた。

北米やロシア、北欧の研究者が3ないし4名招へいされ、日本人研究者とともに研究報告を行い、議論を戦わせてきた。2004年10月開催のシンポジウムは19回目である。これらのシンポジウムに日本の北米研究者が多数、参加してきた。その成果はプロシーディングスとして出版されてきた（例えば、井上 2003a; 岡庭 2004a; 大村 1999; スチュアート 1990b, 1992b, 1995など）。

北海道大学の煎本孝は北方学会を設立するとともに、環極北地域におけるアニミズムとシャーマニズム、環境と宗教、そしてエスニシティとアイデンティティをテーマとした国際シンポジウムを開催した。そのシンポジウムには日本人の北アメリカ先住民研究者も参加し、研究報告を行い、その成果は出版されている(Irimoto and Yamada 1994, 2004; Yamada and Irimoto 1997)。

このように日本における北アメリカ先住民研究は、アラスカ地域とカナダ極北地域、北アメリカ北西海岸地域を中心に展開されてきたが、これらの研究の多くは、文部科学省および学術振興会の科学研究費補助金による海外学術調査や、国立民族学博物館や北海道立北方民族博物館が主催した国際シンポジウムによって大きく推進されてきたといえるだろう。

6.2 テーマ的特長と理論的な傾向

日本の北アメリカ先住民研究、とくにアラスカやカナダ極北地域における研究は、1980年代後半まで考古学的な研究が中心であった。しかし1980年代に入り、文化人類学研究や言語研究が、同地域において盛んになってきた。現在では、大半が文化人類学研究や言語研究である。

研究テーマとしては、社会組織や宗教、儀礼、世界観などの研究から生業の現代的な意義やエスニック・アイデンティティ、国家と先住民との関係、都市の先住民、開発や資源管理の研究に移行しつつあるように思われる。また、認識や伝統的な先住民の知識に関する研究も出てきている。しかし一方では、ジェンダー研究や医療人類学的研究、地球環境問題など他の地域では盛んな研究が、日本人によってはほとんど行われていない⁵。

研究の立場や視点としては、生態学的なアプローチから実践理論や世界システム論を含む広義のポリティカル・エコノミー論へと多様化してきたといえよう。また、日本人研究者による北アメリカ先住民研究からは、新たな理論や視点があり提出されてきてはいない。

6.3 今後の課題

日本人による北アメリカの先住民研究は、日本人によるアジア研究や太平洋研究、アフリカ研究と比べると、研究者や成果報告の点において量的にはるかに少ない。今後、この分野が進展していくということもあまり期待できない。この研究停滞にはお

もに2つの理由が考えられる。

第1に、日本の大学や大学院において、北アメリカ先住民について教えているところが少ないことがあげられよう。北アメリカ先住民研究を行いたい若者は、まったく異なる地域を専門としている教授に師事するか、北アメリカの大学や大学院で学ぶかのいずれかを選択しなければならない。第2に、北アメリカでの調査研究は、旅費や滞在費がかさむことや調査許可の取得が極めて困難であるという事実が挙げられる。ホピやナバホの保留地では撮影することはおろか、はいることさえも許されていない所がある。また、調査ができたとしても、データの公表が制約される場合がある⁶。先住民の言語や知識の記録・保存、自殺など社会問題の解決のための研究、経済開発、先住民権の獲得に役立つ研究のような先住民が望む研究には調査許可があり、かつ先住民側からの協力が得られる。一方、親族研究や宗教研究など多くの人類学的な研究には調査許可がないことがある。

以上のような理由から、日本人による北アメリカ先住民研究の低迷が続くであろうと考えられる。しかしながら、北アメリカ先住民の歴史や現状の研究は、ほかの地域の先住民研究に大きな影響を及ぼす可能性があることを指摘しておきたい。なぜならこれらの先住民は、ほかの地域の先住民がこれまで経験をしたことが無い体験をしているからである。例えば、定住化の社会経済的な諸影響、先住民諸権益問題の処理とその結果、都市への移住と適応、国家と先住民の政治関係、環境・資源問題と先住民との関係、先住民をめぐるNGO・NPO活動や国際政治、先住民によるインターネットのようなメディアの利用など解明すべき多数のテーマが存在している。北アメリカ先住民の間では最先端の現象がおきており、これらを研究することは、アフリカや中南米などほかの地域の先住民社会の変化や開発を考えていく上で大いに役立つと考えられる。したがって、多くの若い日本人研究者がこの新たな領域の人類学研究に従事することを期待したい。

注

* 本論文の原稿に対し、岡田淳子、スチュアートヘンリ、岩崎まさみ、大曲佳世、井上敏昭、岡庭義行、立川陽仁の諸先生からコメントや誤りの指摘を頂戴した。改稿する際に参考にさせていただいた。これらの方々に感謝の微意を表すものである。

1 北方文化研究に関するデータベースが北海道立北方民族博物館によって構築され、『北海道立北方民族博物館研究紀要』やホームページを通して公開されている。この10年の間に出版された北アメリカ関係の出版物の数はかなりの量におよび、本稿ではすべてを網羅することはできない。したがって本稿で取り扱うのは、私が重要であるとする著作に限定されていることをお断りしておく。

2 明治大調査隊の流れを汲むものとして、岡千曲のエスキモーの神話や世界観に関する研究がある(岡 1978; 1982; 1983)。彼は、北アラスカやカナダ中部極北地域にお

ける海と陸の象徴的な対立の問題、タブーと病気の関係、動物をめぐる世界観やタブーに関して研究をしている。また、明治大隊の流れとは別個に、スチュアートはセント・ローレンス島やアリューシャン列島におけるミイラの研究を行っている(スチュアート 1978; 1987; 1993)。

3 ヌネンガック遺跡の最初の調査は1978年に実施された(スチュアート 1981)。

4 カナダや北アメリカの先住民の文化や歴史に関する概略的な入門書として、新保(1968)、清水(1986)、青木(1979)、スチュアート(1991)、富田(1997)、浅井(2004)などがある。

5 北アメリカ先住民のジェンダー論研究では、和智(2000)やStewart(2002b)がある。

6 先住民のことは先住民にしかわからないという立場に立つネイティヴ・アンソロポロジストが活発に調査活動をしているところでは、外部の研究者が参入できる可能性がきわめて低い。

参照・引用文献

阿部隆夫

- 1999 「毛皮取引記録が語るカナダの先住民とヨーロッパ人との関係：1830年代のフォートチバワイヤンとカンバーランドハウスにおける毛皮交易を通じて」 『カナダ研究年報』 19:19-38.

秋道智彌・岸上伸啓編

- 2002 『紛争の海：水産資源管理の人類学』 京都：人文書院。

浅井晃

- 2004 『カナダ先住民の世界：インディアン・イヌイト・メティスを知る』 東京：彩流社。

青木晴夫

- 1979 『アメリカ・インディアン』 東京：講談社。

青柳清孝

- 1993 「文化的多元主義とネイティヴ・アメリカンズ」『米国のエスニック・グループの現状と日本』 pp. 41-48. 東京：外務省。
- 1994 『アメリカエスニック・グループ』 東京：日本国際問題研究所。
- 1996 「北米」 ヨーゼフ・クライナー編 『日本民族学の現在：1980年代から1990年代へ』 pp.369-378. 東京：新曜社。
- 1998a 「シカゴのインディアン：転住の個人史と援助組織」『人間・文化・心』（京都文京大学人間学部研究報告） 1: 237-248.
- 1998b 「シカゴのマグネット・スクール：人種統合への模索」『人間学部研究報告』 2:215-224.

- 1999 「大都市シカゴとインディアン：都市先住民社会史への試み」 青柳清孝・松山利夫編『先住民と都市：人類学の新しい地平』pp.213-228. 東京：青木書店。
- 2000 「インディアン保留区のカジノと開発」 青柳まち子(編)『開発の文化人類学』pp.223-240. 東京：古今書院。
- 2001 「都市インディアンと公立学校教育：アーバカーキーとシカゴの事例」『人間学部研究報告』3:183-191.
- 2002 「博物館の展示とアメリカ・インディアン」『人間学研究』3:85-97.

青柳清孝・綾部恒雄

- 1986 「北アメリカ」日本民族学会編『日本の民族学 1964-1983』pp.295. 東京：弘文堂

渥美一弥

- 1997 「『伝統文化』を「名乗る」こと：カナダ・サーニッチ族の神話、地名、個人名の今日的意味について」『民族学研究』61(1):105-125.

蒲生正男(Gamo, Masao)

- 1980a "Alaskan Studies by Japanese Anthropologists" In KOTANI, Y. and W. WORKMAN (eds.) *Alaska Native Culture and History* (Senri Ethnological Studies no. 4), pp.17-21. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 1980b "The Band Structure and Acculturation among the Eskimos of Nelson Island, Southwest Alaska" In KOTANI, Y. and W. Workman (eds.) *Alaska Native Culture and History* (Senri Ethnological Studies no. 4), pp.157-167. Osaka: National Museum of Ethnology.

HARA (SUE), Hiroko 原(須江)ひろ子

- 1979 『極北のインディアン』東京：玉川大学出版部。
- 1980 *The Hare Indians and Their World* (National Museum of Man Mercury Series, Canadian Ethnology Paper no.63). Ottawa: National Museum of Canada.
- 1989 『ヘヤー・インディアンとその世界』東京：平凡社。

本多勝一

- 1972 『カナダ・エスキモー』東京：講談社。

井上敏昭(Inoue, Toshiaki)

- 1996 「クランから「ネイティブ・アメリカン」へ：アラスカ先住民の儀礼とそこに見るアイデンティティの所在の変化について」『城西国際大学紀要』4(1): 187-206.

日本人による北アメリカ先住民研究の動向について：1990年代以降を中心に*

- 1999 「「文化伝統」としてのビーズワーク：アラスカ・グイッチン社会におけるビーズワークの役割とそこに見る社会的重要性に関する考察」『北海道立北方民族博物館研究紀要』8:31-56.
- 2001 "Hunting as a Symbol of Cultural Tradition: The Cultural Meaning of Subsistence Activities in Gwich'in Athabaskan Society of Northern Alaska." KEEN, Ian and Takako YAMADA, eds. *Identity and Gender in Hunting and Gathering Societies* (Senri Ethnological Series, no. 56), pp.89-101. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2003a 「リアルフードとカリブースキンジャケット：内陸アラスカ先住民グイッチン社会における生物資源利用の諸相」『第17回北方民族文化シンポジウム報告（北太平洋沿岸の文化：資源利用のあり方）』pp.1-5. 網走：（財）北方文化振興協会。
- 2003b 「内陸アラスカ先住民社会におけるサケ資源の利用と管理の緒問題」岸上伸啓編『海洋資源の利用と管理に関する人類学的研究』（国立民族学博物館調査報告46）pp.131-160. 大阪：国立民族学博物館。
- 2004 "The Gwich'in Gathering: The Subsistence Tradition in Their Modern Life and the Gathering against Oil Development by the Gwich'in Athabaskan" IRIMOTO, Takashi and Takako YAMADA, eds. *Circumpolar Ethnicity and Identity* (Senri Ethnological Studies, no.66), pp.183-204. Osaka: National Museum of Ethnology.

煎本孝(Irimoto, Takashi)

- 1981 *Chipewyan Ecology: Group Structure and Caribou Hunting System* (Senri Ethnological Studies, no.8). Osaka: National Museum of Ethnology.

1994 「カナダ・インディアンの文化変化」『カナダ研究年報』14:1-17.

煎本孝・山田孝子編 (Irimoto, Takashi and Takako Yamada eds.)

- 1994 *Circumpolar Religion and Ecology: An Anthropology of the North*. Tokyo: University of Tokyo Press.

2004 *Circumpolar Ethnicity and Identity* (Senri Ethnological Studies, no.66). Osaka: National Museum of Ethnology.

岩崎グッドマンまさみ

- 1999 「サケ資源の減少とナムギースの人々」秋道智彌（編）『自然はだれのもの』pp.65-84. 京都：昭和堂。

2002 「カナダ北西海岸におけるサケをめぐる対立」秋道智彌・岸上伸啓編

『紛争の海』 pp.168-188. 京都:人文書院。

- 2003 「次世代のための資源管理:カナダ西部極北地域における海洋資源共同管理」岸上伸啓編『海洋資源の利用と管理に関する人類学的研究』(国立民族学博物館調査報告46) pp.49-71. 大阪:国立民族学博物館。

加藤普章

- 1990 『多元国家カナダの実験:連邦主義・先住民・憲法改正』東京:未来社。
1996 「近代国民国家と先住民」初瀬龍平編『エスニシティと多文化主義』 pp.233-255. 東京:同文館。

KEEN, Ian and Takako YAMADA (eds.)

- 2001 *Identity and Gender in Hunting and Gathering Societies* (Senri Ethnological Studies no.56). Osaka: National Museum of Ethnology.

木村和男

- 2002 『カヌーとビーヴァーの帝国:カナダの毛皮交易』東京:山川出版社。
2004 『毛皮交易が創る世界:ハドソン湾からユーラシアへ』東京:岩波書店。

岸上伸啓(Nobuhiro Kishigami)

- 1990a 「カナダ・イヌイットの人名、命名方法および名前に基づく社会関係について」『民族学研究』54(4): 485-495。
1990b 「カナダ・イヌイットの居住集団の構成原理について」『社会人類学年報』16: 165-177。
1991 「カナダ国北西準州ペリーベイ村におけるネツリク・イヌイットの拡大家族について」『北海道教育大学紀要 一部B社会科学編』42(1):1-12。
1992 「カナダ極北におけるニュー・エスニシティ」谷本一之編『北方諸民族芸能祭報告』pp.91-107 札幌:北海道教育大学。
1994a 「カナダ極北地域における先住民教育についての文化人類学的研究」『僻地教育研究』48: 25-39。
1994b "Why Become Christians?: Hypotheses on the Christianization of the Canadian Inuit". In IRIMOTO, T. and T. YAMADA eds. pp.221-235. *Circumpolar Religion and Ecology: Anthropology of the North*. Tokyo: University of Tokyo Press.
1995 "Extended Family and Food Sharing Practices Among the Contemporary Netsilik Inuit: A Case Study of Pelly Bay".『北海道教育大学紀要 一部B』45(2): 1-9。
1996a 「カナダ極北地域における社会変化の特質について」スチュアートヘンリ編『採集狩猟民の現在』pp.13-52. 東京:言叢社。
1996b 「カナダ・イヌイット社会の社会・経済変化」『国立民族学博物館研究

報告』21(4): 715-775.

- 1997 "Personal Names, Name Souls and Social Change Among Canadian Inuit: A Case Study of Akulivik Inuit, Nunavik, Canada". In T. YAMADA and T. IRIMOTO, eds., pp.151-166. *Circumpolar Animism and Shamanism*. Sapporo: Hokkaido University Press.
- 1998 『極北の民 カナダ・イヌイット』東京：弘文堂。
- 1999a 「カナダにおける都市居住イヌイットの社会・経済状況：モントリオールの事例報告を中心に」『国立民族学博物館研究報告』24(2): 205-245.
- 1999b 「カナダ・イヌイットはなぜ都市をめざすのか：モントリオール地区の事例を中心に」青柳清孝・松山利夫編『先住民と都市：人類学の新しい地平』pp.195-212. 東京：青木書店
- 1999c 「カナダ・イヌイットの個人名と命名」上野和男・森謙二編『名前と社会』pp.252-271. 東京：早稲田大学出版会。
- 1999d "Why Do Inuit Move to Montreal?: A Research Note on Urban Inuit." *Études/Inuit/Studies* 23 (1/2): 221-227.
- 1999e "Life and Problems of Urban Inuit in Montreal: Report of 1997 Research." 『人文論究』68: 81-109.
- 2000 "Contemporary Inuit Food Sharing and Hunter Support Program of Nunavik, Canada." G.W. WENZEL, G. HOVELSRUD-BRODA and N. KISHIGAMI eds. *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies no.53), pp.171-192. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2001a 「北米北方地域における先住民による諸資源の交易について：毛皮交易とその影響を中心に」『国立民族学博物館研究報告』25(3):293-354.
- 2001b 「カナダ・イヌイット社会における海洋資源の利用と管理：ヌナヴィクのシロイルカ資源の場合」『人文論究』70: 29-52.
- 2002a 「18-20世紀におけるベーリング海峡地域の先住民交易と社会組織」佐々木史郎編『開かれた系としての狩猟採集社会』(国立民族学博物館調査報告34) pp.39-50. 大阪：国立民族学博物館。
- 2002b "Urban Inuit in Canada: A Case from Montreal." *Indigenous Affairs* 3-4 (2002) : 54-59.
- 2002c 「カナダ極北地域における海洋資源の汚染問題：その現状と文化人類学者の役割」『国立民族学博物館研究報告』27(2): 237-281.
- 2002d "Inuit Identities in Montreal, Canada" *Études/Inuit/Studies*

26(1):183-191.

- 2002e "Living as an Inuk in Montreal: Social Networks and Resource Sharing." 『人文論究』 71: 73-84.
- 2002f 「カナダ極北地域における海洋資源をめぐる紛争：ヌナヴィク地域のシロイルカ資源を中心に」 秋道智彌・岸上伸啓編『紛争の海：水産資源管理の人類学』 pp.295-314. 京都：人文書院。
- 2003a 「カナダ極北圏ヌナヴィク地域におけるシロイルカ資源の共同管理について」 岸上伸啓編 『海洋資源の利用と管理に関する人類学的研究』（民族学博物館調査報告46） pp.101-129. 大阪：国立民族学博物館。
- 2003b 「狩猟採集民社会における食物分配の類型について－「移譲」、「交換」、「再・分配」－」 『民族学研究』 68(2): 145-164.
- 2004a 「カナダ・イヌイット社会におけるメディアの利用について：ヌナヴィク地域の事例を中心に」 『人文論究』 73： 17－31.
- 2004b "Cultural and Ethnic Identities of Inuit in Canada." In IRIMOTO, Takashi and Takako YAMADA (eds.) pp.81-93. *Circumpolar Ethnicity and Identity* (Senri Ethnological Studies no.66). Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2004c "A New Typology of Food-Sharing Practices among Hunter-Gatherers, with a Special Focus on Inuit Examples" *Journal of Anthropological Research* 60: 341-358.

岸上伸啓編

- 2003 『海洋資源の利用と管理に関する人類学的研究』（国立民族学博物館調査報告 46） 大阪：国立民族学博物館。

KISHIGAMI, Nobuhiro and James SAVELLE (eds.)

(In Press) *Indigenous Use and Management of Marine Resources* (Senri Ethnological Series). Osaka: National Museum of Ethnology.

岸上伸啓、スチュアートヘンリ

- 1994 「現代ネツリック・イヌイット社会における社会関係について：カナダ国北西準州ペリーベイ村の事例を中心に」 『国立民族学博物館研究報告』 19(3):405-448.

KOTANI, Yoshinobu and William WORKMAN (eds.)

- 1980 *Alaska Native Culture and History* (Senri Ethnological Studies no. 4). Osaka: National Museum of Ethnology.

益子待也

- 1982 「ボトラッチの神話学：トリンギット族における死と再生の論理」 『民族学研究』 47(3): 221-244.

日本人による北アメリカ先住民研究の動向について：1990年代以降を中心に*

- 1992 「トリンギットの社会と儀礼：南東アラスカの『ポトラッチ』における言葉の交換」岡田宏明・岡田淳子編 『北の人類学』 pp.79-105. 京都：アカデミア出版会。
- 1993 「鮭の村を訪れた少年：北米北西沿岸インディアンの異界訪問譚」『口承文藝研究』 16:29-48.
- 2000 「メトラカトラにおける「伝統」の創造について」岡田淳子編『変容するMetlakatla Indian Community』（平成10・11年度科学研究費補助金国際学術研究 基盤(2)(B)「北西海岸インディアンの開発人類学的研究」研究成果報告書），pp.26-29. 札幌：北海道東海大学。

松林義行(Matsubayashi, Yoshiyuki)

- 1998a 「<ダンカニアン>という名の先住民：Alaska-TsimshianにおけるDuncan Society Model」『（明治大学研究論集）政治学研究論集』 7: 93-111.
- 1998b "Immigration and Christianity in Alaska-Tsimshian."『北海道立北方民族博物館』 7:31-50.

宮岡伯人

- 1978 『エスキモーの言語と文化』東京：弘文堂。
- 1987 『エスキモー：極北の文化誌』東京：岩波書店。
- 1992 「環北太平洋の言語」宮岡伯人編 『北の言語：類型と歴史』 pp.3-65. 東京：三省堂。
- 1994 "The Yupik World Seen Through Linguistic Demonstratives." In IRIMOTO, Takashi and Takako YAMADA eds. *Circumpolar Religion and Ecology: An Anthropology of the North*. pp.234-249. Tokyo: University of Tokyo Press.
- 1996 "Sketch of Central Alaskan Yupik, an Eskimoan Language." In GODDARD, I. ed. *Languages* (Handbook of North American Indians no.17), pp.325-363. Washington, D.C.: Smithsonian Institution.
- 2000 "Morphologie Verbale en Yupik Alaskien Central." In TERSIS, Nicole and Michele THERREIR eds. *Les Langues Eskaleoutes: Sibirie, Alaska, Canada, Groenland*, pp. 225-248. Paris: Centre National de la Recherches Scientifique.

宮岡伯人編

- 1992 『北の言語：類型と歴史』東京：三省堂。

室淳子

- 1997 「チペワ文化の再構築：Louise ErdrichのLove Medicineをめぐって」

『大阪大学言語文化学』6:131-143.

1999 「北アメリカ先住民の現代文学における混合性と雑種性」『カナダ文学研究』7:51-63.

2000 「言葉と沈黙：N.Scott MomadayのHouse Made of Dawnをめぐって」『大阪大学言語文化学』9:141-151.

大曲佳世(Ohmagari, Kayo)

1995a "Culturally Sustainable Development and James Bay Cree Women." In PENTLAND, David H. ed. *Papers of the Twenty-Sixth Algonquian Conference*, pp.322-334. Winnipeg: University of Manitoba.

1995b "Traditional Knowledge as an Adaptive Strategy for Sustainable Livelihood among the Western James Bay Cree." In SINGH, N. and L. HAM eds. *Community-Based Resources Management and Sustainable Livelihood: The Grass-Roots of Sustainable Development*, pp.118-139. Winnipeg: International Institute for Sustainable Development.

1996 Social Change and Transmission of Knowledge and Bush Skills among Omushkegowuk Cree Women. Ph.D. Dissertation. University of Manitoba.

1998 「現代の野生動物資源利用：北カナダの事例から」『鯨研通信』398:11-17.

2004 "The Role of Traditional Food in Identity Development among the Western James Bay Cree" In IRIMOTO, Takashi and Takako YAMADA, eds. *Circumpolar Ethnicity and Identity* (Senri Ethnological Studies, no.66), pp.127-138. Osaka: National Museum of Ethnology.

Ohmagari, Kayo and Fikret Berkes

1997 "Transmission of Indigenous Knowledge and Bush Skills among the Western James Bay Cree Women of Subarctic Canada." *Human Ecology* 25(2):197-222.

大貫良夫

1977 「トーテム・ポール:その社会的ならびに歴史的意味について」『民族学研究』41(4):317-329.

大塚和義編

2001 『ラッコとガラス玉: 北太平洋の先住民交易』大阪：千里文化財団。

2003 『北太平洋の先住民交易と工芸』京都：思文閣出版。

日本人による北アメリカ先住民研究の動向について：1990年代以降を中心に*

岡千曲

- 1978 「アザラシ・カリブー・サケ」『相模女子大学紀要』42:253-259.
1982 「北アラスカにおける海の民と陸の民」『政治学論叢（明治大学）』50(5/6):377-390.
1983 「タブー・病気・シャーマニズム」『相模女子大学紀要』47:179-184.

岡田淳子

- 1999 『北の民族誌』京都：アカデミア出版会。
2000a 「メトラカトラ・コミュニティ開発の原動力を探る」岡田淳子編『変容するMetlakatla Indian Community』（平成10・11年度科学研究費補助金国際学術研究 基盤(2)(B)「北西海岸インディアンの開発人類学的研究」研究成果報告書），pp.18-21. 札幌：北海道東海大学。
2000b 「メトラカトラの現地調査成果：中間報告」岡田淳子編『変容するMetlakatla Indian Community』（平成10・11年度科学研究費補助金国際学術研究 基盤(2)(B)「北西海岸インディアンの開発人類学的研究」研究成果報告書）pp.40-47. 札幌：北海道東海大学。

岡田淳子編

- 2000 『変容するMetlakatla Indian Community』（平成10・11年度科学研究費補助金国際学術研究 基盤(2)(B)「北西海岸インディアンの開発人類学的研究」研究成果報告書）。札幌：北海道東海大学。

岡田宏明

- 1994 『北の文化誌』京都：アカデミア出版会。
1996 「エスキモー」ヨーゼフ・クライナー編『日本民族学の現在：1980年代から1990年代へ』pp.379-387. 東京：新曜社。
1997 「ロシア期におけるアリユートの文化変化」『北海道立北方民族博物館研究紀要』6:1-7.
2000 「メトラカトラ住民の生業戦略と適応過程」『変容するMetlakatla Indian Community』（平成10・11年度科学研究費補助金国際学術研究 基盤(2)(B)「北西海岸インディアンの開発人類学的研究」研究成果報告書）pp.22-25. 札幌：北海道東海大学。

岡田宏明・岡田淳子(Hiroaki Okada and Atsuko Okada)

- 2000 "Port Moller: An Ecological Climax under Changing Climate"『北海道立北方民族博物館研究紀要』9:1-18.

岡田宏明・岡田淳子編(Hiroaki Okada and Atsuko Okada, eds.)

- 1992a 『北の人類学』京都：アカデミア出版会。
1992b Heceta Island, Southeasren Alaska(2) - Anthropological Survey in 1989 & 1990. Sapporo: Dept. of Behavioral Science, Faculty of

Letters, Hokkaido University.

岡庭(松林)義行 (Okaniwa (Matsubayashi), Yoshiyuki)

- 2000 「アラスカ・チムシアンと宣教師ダンカン」岡田淳子編『変容する Metlakatla Indian Community』(平成10・11年度科学研究費補助金国際学術研究 基盤(2)(B)「北西海岸インディアンの開発人類学的研究」研究成果報告書) ,pp.34-38. 札幌:北海道東海大学。
- 2004a 「アラスカ・チムシアンにおける文化接触」『第18回北方民族文化シンポジウム報告:北太平洋沿岸の文化(文化接触と先住民社会)』 pp.15-19. 網走:(財)北方文化振興協会。
- 2004b 「パフォーマンスの人類学:カナダ・クワキウトルにおける<ツェカ>の劇場性」『帯広大谷短期大学紀要』 41:46-65.

大村敬一 (Keiichi Omura)

- 1994 「描画から何を知ることができるのか?:カナダ・イヌイットの描画89例の特徴とその分析上の諸問題に関する予備的考察」『象徴図像研究』 8:19-38.
- 1994 「消えた総数は何を意味しているか?:カナダ・イヌイットの言語の変化とその社会・文化的背景」『(早稲田大学大学院)文学研究科紀要別冊(哲学・史学編)』 21:105-116.
- 1995 「「伝統」と「近代」のブリコラージュとしての彫刻:ネツリック・イヌイットの彫刻活動に関する覚え書き」『人間科学研究』 8(1):1-14.
- 1996a 「環境を読む鍵としての色彩:カナダ・イヌイットの色彩語彙と色彩カテゴリーに関する試論」『北海道立北方民族博物館研究紀要』 5:5-45.
- 1996b 「「再生産」と「変化」の蝶番としての芸術:社会・文化変化の中で芸術が果たす役割」スチュートヘンリ編『採集狩猟民の現在:生業文化の変容と再生』 pp.85-124. 東京:言叢社。
- 1997 「イメージの幹としての「からだ」:イヌイットの身体観と世界観の関係に関する覚え書き」『体育の科学』 47(7):518-527.
- 1998 a 「カナダ・イヌイトの日常生活における自己イメージ:「イヌイトのやり方」と「戦術」」『民族学研究』 63(2): 160-170.
- 1998b "A Research Note on the Color Terminology System in the Natsilingmiutut Dialect of Inuktitut" *Études/Inuit/Studies* 22(1):123-138.
- 1999 「カナダ・イヌイトの環境認識からみた「資源」と「開発」」『第13回北方民族文化シンポジウム報告』 pp.13-28. 網走:(財)北方文化振興協会。
- 2001a 「イヌイトのナビゲーションにみる日常実践のダイナミズム:交差点としての民族誌」早稲田大学文学研究科 学位(博士)請求論文。

日本人による北アメリカ先住民研究の動向について：1990年代以降を中心に*

- 2001b 「交差点としての「イヌイト・アート」」『国立民族学博物館研究報告別冊』22:79-101.
- 2002a "Construction of Inuinnaqtun (Real Inuit-way): Self-Image and Everyday Practices in Inuit Society." In STEWART, Henry, Alan BARNARD and Keiichi OMURA, eds. *Self- and Other-Images of Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies no. 60), pp.101-111. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2002b 「伝統的な生態学的知識」という名の神話を超えて」『国立民族学博物館研究報告』27(1):25-120.
- 2002c 「カナダ極北地域における知識をめぐる抗争：共同管理におけるイデオロギーの相克」秋道智彌・岸上伸啓編『紛争の海』pp.149-167. 京都：人文書院
- 2003a 「カナダ極北圏におけるヌナヴト野生生物管理委員会の挑戦：2つの科学の統合から協力へ」岸上伸啓編『海洋資源の利用と管理に関する人類学的研究』（国立民族学博物館調査報告 46）pp.73-100. 大阪：国立民族学博物館
- 2003b 「近代科学に抗する科学：イヌイトの伝統的な生態学的知識にみる差異の構築と再生産」『社会人類学年報』29:11-42.

大島稔 (Oshima, Minoru)

- 1994 "Prosody and Vowel Reduction in Eastern Aleut." MIYAOKA, Osahito ed. *Languages of the North Pacific Rim* (Hokkaido University Publications in Linguistics 7), pp.149-157. Sapporo: Department of Linguistics, Faculty of Letters, Hokkaido University.
- 2000 "Two Traditional Stories of Bering Island Aleut". MIYAOKA, Osahito ed. *Languages of the North Pacific Rim* 5. pp.125-138. Kyoto: Graduate School of Letters.

齋藤玲子

- 2000 「メトラカトラにおける観光と芸能・工芸に関する活動」『変容するMetlakatla Indian Community』（平成10・11年度科学研究費補助金国際学術研究 基盤(2)(B)「北西海岸インディアンの開発人類学的研究」研究成果報告書）。札幌：北海道東海大学。

清水知久

- 1986 『米国先住民の歴史』東京：明石書店。

新保満

- 1968 『カナダ・インディアン』東京：三省堂。

- 1993 『カナダ先住民デネーの世界:インディアン社会の変動』東京:明石書店。
- 1995 「カナダ・インディアンを対象とした学校教育:デネーの事例を中心に(2)」『日本女子大学紀要(人間社会学部)』6:61-69.
- 1999 「デネー社会の変容:都市移住を志向する先住民社会」青柳清孝・松山利夫編『先住民と都市:人類学の新しい地平』pp.180-194. 東京:青木書店。

新保満、シンサ・アン・ストラザーズ

- 1999 『変貌する先住民社会と学校教育:カナダ北西準州デネーの事例』東京:御茶ノ水書房。

祖父江孝男

- 1972 『アラスカ・エスキモー』東京:社会思想社。

スチュアート ヘンリ(Stewart Henry)

- 1978 「セント・ローレンス島発見の凍結ミイラについて」『ドルメン』17:111-117.
- 1981 「極北先史文化の調査:ヌネンガック遺跡」『考古学ジャーナル』186:16-20.
- 1987 「アリュート民族のミイラ作り風習」『北海道考古学』23:89-100.
- 1990a 「伝統ネツリック・イヌイットのイヌクシュクによるカリブー猟」『民族学研究』55(1):75-86.
- 1990b 「食料・女性・世界観:中部極北カナダの伝統イヌイット社会における食料の捕獲と分配」『第4回北方民族文化シンポジウム報告:北の食と住』,pp.46-50. 網走:(財)北方文化振興協会。
- 1991a 「食料分配における男女の役割分担について:ネツリック・イヌイット社会における獲物・分配・世界観」『社会人類学年報』17:115-127.
- 1991b 『北アメリカ先住民族の謎』東京:光文社。
- 1992a 「ネツリック・イヌイットの漁労:夏の築漁を中心に」『北海道立北方民族博物館研究紀要』1:31-52.
- 1992b 「定住と生業:ネツリック・イヌイットの伝統的生業活動と食生活にみる継承と変化」『第6回北方民族文化シンポジウム報告:定住と移動』pp.75-85. 網走:(財)北方文化振興協会。
- 1993a 「ネツリック・イヌイット社会における春の生業:5~6月のカリブー猟と漁労を中心に」『北海道立北方民族博物館紀要』2:13-36.
- 1993b 「アリュート民族のミイラ風習」編者 『日本・中国ミイラ信仰の研究』pp.333-354. 東京:平凡社。
- 1995 「現代のネツリック・イヌイット社会における生業活動:生存から文化

日本人による北アメリカ先住民研究の動向について：1990年代以降を中心に*

的サバイバルへ』『第9回北方民族文化シンポジウム報告』pp.37-68. 網走：(財)北方文化振興協会。

- 1996 「現在の採集狩猟民にとっての生業活動の意義」 スチュアートヘンリ編『採集狩猟民の現在：生業文化の変容と再生』pp.125-154. 東京：言叢社。
- 1997 「北部ケベックの先住民」西川長男・渡辺公三・ガバン・マコーマック編『多文化主義・多言語主義の現在』,pp109-132. 京都：人文書院。
- 1998a 「民族呼称とイメージ -<イヌイト>の創成とイメージ操作」『民族研究』63(2): 151-159.
- 1998b 「先住民族が成立する条件：理念から現実への軌跡」清水昭俊編『周辺民族の現在』pp.235-263. 京都：世界思想社。
- 1999 「都市の「インディアン」：カナダとアメリカの政策と先住民の都市化」青柳清孝・松山利夫編『先住民と都市：人類学の新しい地平』pp.163-179. 東京：青木書店。
- 2002a "Ethnonyms and Images: Gnesis of the 'Inuit' and Image Manipulation." In STEWART, Henry, Alan BARNARD and Keiichi OMURA, eds. *Self- and Other-Images of Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies no. 60) pp.85- 100. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2002b "Kipijuituq in Netsilik Society: Changing Patterns of Gender and Patterns of Chnaging Gender." FRINK, L., R. S. SHEPARD, and G. A. REINHARDT, eds. *Many Faces of Gender: Roles and Relationships Through Time in Indigenous Northern Communities*. pp.13-25. Boulder: The University of Colorado Press.
- 2002c 「先住民と国民国家：カナダ・ケベック州を中心に」梶田孝道・小倉充夫編『国際社会③国民国家はどう変わるか』, pp.195-223. 東京：東京大学出版会。
- STEWART, Henry, Alan BARNARD and Keiichi OMURA (eds.)
2002 *Self-and Other-Images of Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies no.60). Osaka: National Museum of Ethnology.
- スチュアートヘンリ・手塚薫・熊崎保
1994 「北極の民族考古学:カナダ北西準州ベリーーベイ村周辺の遺構」『北海道開拓記念館研究年報』22:35-64.
- 立川陽仁
1999a 「[研究動向]ポトラッチ研究史と将来の展望」『社会人類学年報』

25:167-185.

- 1999b 「クワクワカワクゥ貴族層の衰退：カナダ植民地統治期における世界観とポトラッチの変容」『民族学研究』64(1):1-22.
- 2002 a 「サケ漁業・缶詰業とレクウィルトクの経済活動」『社会人類学年報』28:79-105.
- 2002b 「クワクワカワクゥはいかに漁業に参入したか：企業家の誕生、活動と戦略」『文化人類学研究』3:120-142.
- 2003 「海上におけるサケの『管理』：カナダ、北西海岸のサケ漁業漁師に見られる実践と認識」岸上伸啓（編）『海洋資源の利用と管理に関する人類学的研究』（国立民族学博物館調査報告46）pp.161-178. 大阪：国立民族学博物館。
- 2004a 「＜意味＞と＜型＞：ポトラッチをめぐるクワクワカワクゥ内外の視点」渡邊欣雄編 『世界の宴会』（『アジア遊学』61）pp.174-183. 東京：勉誠出版。
- 2004b 「カナダの北西海岸先住民にとってのサケの社会・経済的な意義：現代のクワクワカワクゥ漁師の経済活動に関する事例から」『国立民族学博物館研究報告』29(2).307-352.

谷本和子 (Tanimoto, Kazuko)

- 1994 "Nez Perce Elders and Contemporary Enculturation" *The Journal of Intercultural Studies* 21: 80-106.
- 1998a 「インディアンとして宿るティピ」『住まいをつむぐ』佐藤浩司編 pp.89-106. 京都：学芸出版社。
- 1998b 「アメリカ・インディアンのアイデンティティ」清水昭俊編『周辺民族の現在』pp.212-234. 京都：世界思想社。
- 1998c 「ネズ・パース・インディアンの家族機能についての一考察：核家族の限界と拡大家族の有効性」『研究論集/関西外国語大学研究論集』67:449-456.

谷本一之

- 1999 「北方諸民族芸能のタイポロジー」『月刊言語』21(8):70-75.

谷本一之, 森田稔

- 1992 『北極圏:エスキモーの歌と踊り（地球の音楽66）』東京：日本ビクター。

手塚薫 (Tezuka, Kaoru)

- 1999 「極北圏における大型住居の出現と文化接触の関係」『北海道開拓記念館紀要』27: 77-84.
- 2002 「ラブラドル・エスキモーの資源利用と毛皮交易：ヌネンガック遺跡 Nunaingok site (JcDe-1)の動物依存体の分析を中心に」佐々木史郎(編)

日本人による北アメリカ先住民研究の動向について：1990年代以降を中心に*

『開かれた系としての狩猟採集社会』 pp.17-37. 大阪：国立民族学博物館。

- 2003 「北米大平原のバイソン利用形態の変化」『「北方文化共同事業」2000-2002年度調査報告』 pp.183-196. 札幌：北海道開拓記念館。

富田虎男

- 1997 『アメリカ・インディアン史 第3版』東京：雄山閣。

鶴月裕典

- 2000 「アメリカ・インディアン史の自意識の多様性」五十嵐武士編『アメリカの多民族体制』東京：東京大学出版会。

YAMADA, Takako and Takashi IRIMOTO (eds.)

- 1997 *Circumpolar Animism and Shamanism*. Sapporo: Hokkaido University Press.

WENZEL, George W., Grete HOVELSRUD-BRODA, and Nobuhiro KISHIGAMI (eds.)

- 2000 *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies No.53). Osaka: National Museum of Ethnology.

和智綏子(Wachi, Yashuko)

- 1994 What Comes Next? Native Americans of San Diego County: A Study of Uncertainty for an Ethnic Minority Group of Southern California. Ph.D.Dissertation University of California, San Diego.

- 1999 「南カリフォルニア・インディアンと都市社会：文化保存と民族アイデンティティの諸問題」青柳清孝・松山利夫編『先住民と都市：人類学の新しい地平』 pp.229-247. 東京：青木書店。

- 2000 「イヌイット神話の中のセドナ：少女と犠牲についてのジェンダー化された共同体の記憶の＜置き換え＞に関する一試論」『環太平洋女性学研究会会報Rim』 2(2):27-42.

渡辺宏江

- 1999 「現代のメティス社会：マリア・キャンベル、ビトリリス・カルトンの肉声」『カナダ研究年報』 13:20-40.

渡部仁(Watanabe, Hitoshi)

- 1988 「北太平洋沿岸文化圏：狩猟採集民からの視点I」『国立民族学博物館研究報告』 13(2):297-356.

- 1992 「北洋沿岸文化圏：狩猟採集民文化の共通性とその解釈問題」宮岡伯人編『北の言語：類型と歴史』 pp.67-107. 東京：三省堂。

- 1993 "The Northern Pacific Maritime Culture Zone: A Viewpoint on

Hunter-Gatherer Mobility and Sedentism." AIKENS, M. and S. N. Rhee, eds. *Pacific Northwest Asia in Prehistory: Hunter-Fisher-Gatherers, Farmers and Sociopolitical Elites*. pp.105-109. Pullman: Washington State University.

渡辺操、岡正雄、杉原荘介編

1961 『アラスカ』 東京: 古今書院。